

「自ら育つ力をもって生まれた子どもたち。その出発点における教員の関わり方とは」

今回の学習指導要領の改訂は、学びの主体は子どもであることを改めて定義し、幼稚園から高校まで一貫して、何を教えるかではなく、何ができるようにするかという視点で書かれていることが特徴です。図1は、そのスタート地点である幼稚園を卒業するまでに育ってほしい、資質・能力。先生と子どもの関わりの出発点である幼稚園において、子ども自身の自らを成長させる力を最大限に発揮させるために、先生方がどう関わり、どう伸ばそうとしているのか？ 子どもの力を活かした取り組みを行う「ふじようちえん」の加藤園長にお話を伺いました。

図1 幼稚園教育要領(平成29年告示)が示す「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」



幼稚園教育要領では、これらの項目ごとに具体的な姿を示し、教師が指導を行う際に考慮するものとしている。

園舎にあえて「ちょっとした不便を設置」

私たち教員の仕事は、「教えること」でしょうか。それに対するふじようちえんの答えは、園舎の随所にも表れています。

十数年前、今の園舎に改築した際、ちょっとした「不便」をたくさんつくりました。例えば、園庭に面した引き戸は、自動でぴたり閉まるタイプではなく、最後は力を入れないと閉まりません。いい加減に閉めると隙間ができて、ほかの子に「寒いよ」と言われちゃいます。また、手洗いなどの水

道は、センサー付きではなく蛇口をひねる旧式です。さらに園庭の水道には流し台を設けず、水が直に地面に落ちるようにしました。自分の足元が濡れないよう、水の出し方を微妙に調整する必要があります。芝生の中庭も、平らではなくデコボコしています。このAIの時代に、なぜそんな不便をわざわざつくったか。それは、物事の道理を子ども自身が体で感じ取って、自分で考え工夫してほしいからです。デコボコのある中庭でつまずいて転んでしまう子もいますが、痛い思いをしたからこそ、次は転ばないためにどうしたらいいかを自ら考え始めます。体

ふじようちえん 園長 加藤積一先生



一般企業勤務から会社経営を経て、ふじようちえん園長に就任。学校法人みんなのひろば理事長として、認可保育園や東京都認証保育所も経営。多くの社会経験と子をもつ親としての目線を活かし施設運営にあたっている。著書に「ふじようちえんのひみつ」(小学館)。

【ふじようちえんの概要】

東京都立川市にある私立幼稚園。モンテッソーリ教育を取り入れた教育実践や、「巨大な遊具」として設計された1周約180メートルある楕円形の園舎が特徴。OECD/CELE 学校施設好事例集(第4版) 最優秀賞など表彰多数。

「子どもは何もできないから大人が教え込む」ではない

園舎を含め、子どもを取り巻くすべてが、子どもの育ちに貢献する「道具」になるのです。そして、先生もまた、そんな重要な「道具」の一つだと捉えています。

根本にあるのは、「子どもは自らを成長発達させる力をもって生まれてく



園舎も、教具も
先生ですら、子どもが自らを育てる力を
発揮させるための「道具」

円形園舎の屋根は、ウッドデッキが伸びやかに広がっている、「第2の園庭」。円形にしたのは、直線であれば端まで行くと子どもは立ち止まらざるを得ないが、円形であれば自分自身が心ゆくまでいつまでも走り続けられるから。子どもの成長を設備や大人が制約することなく、最大限成長できることを目指した考え方が、ここにも反映されている。



る」という考え方です。「子どもは何

もできない存在だから大人が教え込む」ではなく、自ら育つ力を存分に発揮させてあげることが、私たち教員の大きな役割ではないでしょうか。

大人はつい「こうしなさい」と言葉をかけたくなりますが、実は教えなければ教えないほど、子どもは自ら学びます。例えば、本園では、屋上デッキから大ケヤキに登れるようになっていますが、「気を付けなさい」と言われるまでもなく、最初からつべんまで登ろうとする子はいません。手が届くところから挑戦を始め、時には足を踏み外したりしながら、繰り返し挑戦、少しずつ登れるようになっていきます。このような小さな満足感や達成感の積み重ねが、自信になり、自立へと向かうのではないのでしょうか。

本園は「幸せな未来をつくる」という理念のもと、思いやりがあつて自立した子どもの育成を目指しています(図2)。課題にぶち当たっても、自ら工夫して解決策を考えたり、新しいものを生み出していく。それこそ「未来をつくる力」になっていくのだと信じています。

興味関心との出会い 自己選択の機会を与える

子どもが自ら学ぶと言っても、それを教員がどうサポートするかは重要です。本園ではどんな取り組みを行っているか、いくつか紹介しましょう。

先日、たまたま紙製オベラガラスの頂き物があったので、園庭でバードウォッチングをしました。図鑑からコピーした鳥の写真の木にぶら下げたフィクションですが、それを見つけると子どもたちは大喜び。さらに、「もつと上にはどんな鳥がいるかな?」と視線を上に向けると、「スズメがいたよ」「カラス大きいね」と空を飛ぶ本物の鳥に興味を示す子も出てきました。

こうして遊びをきっかけにすると、自然に興味は広がるものです。子どもにはさまざまなことにチャレンジして、自分が好きな何かと出会い、もっと知りたいという気持ちを育ててほしい。そのために先生たちは、恐竜の骨や卵を工作して園庭に置いて子どもが発見させてみたり、落ち葉プールを

あなたは何をしたいの?.. 常に問いかけ、自分の意思を育む

作ったり、とにかく面白いことをたくさん企画しているのです。

また、子どもには自分の意思をもつてほしいので、日常生活のさまざまな場面に自己選択の機会を設け、常に「あなたは何をしたいの?」と問いかけています。例えば、本園では、みんなでこれをやりましょうという集団の活動のほか、思い切り自由に遊ぶ時間も重視しています。外で走り回るなり、室内でお気に入りの教具で遊ぶなり、子ども一人ひとりが自分で何をするか決めて活動します。そこで



写真上：引き戸をぴったり閉めることで、物事をきちんとする気持ちよさを体で学ぶ／同左下：トイレ出入口にスリッパ型テンプレートを設置すると、子ども自らスリッパを揃えるように。枠にはめることで小さな達成感を得ている／同右下：お昼は給食かお弁当か選択可能。子どもの意思を大事にしている。

の先生の仕事は、子どもにとつて魅力的な環境を整え、子どもに選択の自由を与え、適度な距離感で自発的な活動を援助すること。それによって、子どもがもつ力を自ら伸ばすきっかけを提供しているのです。

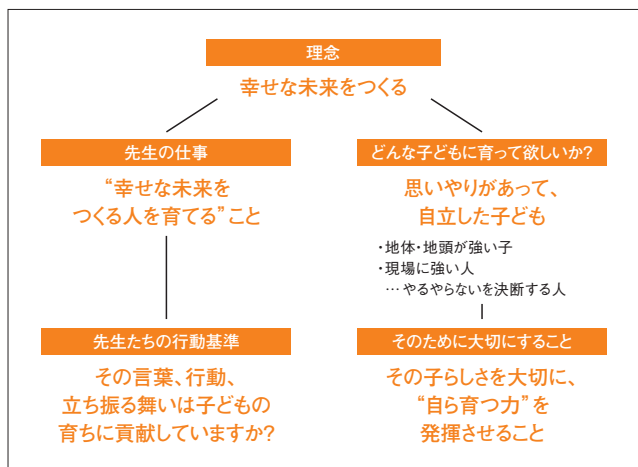
このほかにも、昼食を園の給食にするか家庭のお弁当にするかを選択したり、園内で着るTシャツを8色のラインナップから自分で選んで着たり、自己選択の機会をできるだけ多く作るようにしています。「自分で選んだことをする」こそ、本当の平等。みんな



写真下：園庭を囲うように建つ園舎／同左：職員室の引き戸を全開すると園庭と一体化。園長先生のデスクは、職員室の中ではなく子どもたちが遊ぶ園庭に向かっている。



図2 「学校法人みんなのひろばの存在と意志」より(抜粋)



先生の心がけと実践のポイント、園内各場所や行事・イベントで育てたいことなどを含めた、全体構想図を同園教職員で共有している。

など同じことをするように管理するのではなく、「自分はこれをやりたい」という情熱を育むことを大切にしています。

**教員自身が豊かに
毎日を過ごしているか**

私が園の先生たちに、常に考えてほしいと伝えているのが、「その言葉、行動、立ち振る舞いは子どもの育ち

に貢献しているか」。先生がつまらないと思いがらやることは、子どもに響きません。自由に発想して、先生自身が得意なことや面白いと思うことをたくさん示して、ワクワク感を与えたいものです。

そのためには、幼稚園の教員としての知識やスキルに限らない、幅広いインプットが大切でしょう。地域の活動に参加したり、自然体験に出掛けたり、さまざまな実体験を通じて、社会人として豊かで引き出しの多い先生になつてほしいと願っています。

そうした考えから、例えば教職員研修旅行には、あえて幼児教育と関係ない内容も取り入れており、自動車の解体工場の見学に行ったこともあります。園の外側にある社会に目を向け、さまざまな仕事の方々がどんな思いで働いているかを知り、外から幼児教育がどう見られているかを感じ、日々活かしていきたいと思えます。

私たちが子どもの育ちに関われるのは、ほんの3年間です。本園でのびのび育つた子どもたちも、やがて小学校、中学校、高校へと進んでいきます。そのなかで、幼稚園時代に自分で挑戦してできたという自信や、思い切り好きなことを楽しんだ経験を忘れずに、自分の強さを信じて、可能性を存分に伸ばしてほしいですね。

VOICE
現場の先生に
聞きました

**自信がなかった子ども
「できた」を重ねて積極的に**

教員として子どもに接するとき、まず意識しているのは、どこまで子ども自身でできそうかを把握することです。そして、ちょっと背伸びしたらできそうなのを見つけてアプローチしています。例えば、もう少しで着替えができそうな子には、ボタンの外し方をゆっくり丁寧にやって見せるなどの手助けをします。それで自分なりに考えながらやってみて、ひとりできた時、子どもは何ともいえない誇らしげな笑顔を見せてくれるのです。

すべて大人がやってあげたり、その子にとってまだ難しいことをやらせたりしても、子どもの自信にはつながらないでしょう。小さなことでも、「自分で挑戦してできた」という経験ができるように日々接しています。

入園時、自分に自信がなくて消極的な子も少なくありません。特に第2子以降の子は、姉姉と比べて自分ではできないと思いがちです。しかし、小さな「できた」の積み重ねや、興味あることに出合い何度も繰り返し返すなかで、少しずつ自信が出てくると、ほかのことでも積極的に動くようになります。そんな子どもたちの成長を見ることが、この仕事の醍醐味ですね。

(主任・徳野友美先生)